

2012
2・20

閉鎖炉の再稼働 による釜石市 災害廃棄物 処理事業

「あり得ない」。通常な
ら、この一言で終
わる話だった。三二年間も
働き続けて老朽化し、一旦
は閉鎖した（こみ溶融炉）
を再稼働させる!? 震災の
三か月前に新施設へパトン
タッチし、解体寸前だった
のだ。
しかし、震災と津波によ
る災害廃棄物（がれきと、

津波堆積物）の量は膨大で、
新設炉だけで処理しきれ
るものではない。そこで、閉
鎖炉に目が向けられた。
溶融炉は、こみを燃やす
のではなく、高温で融かす
方式だ。そのため、可燃物
のみならず不燃物も処理が
でき、台風や水害時の災害
ごみ処理実績もある。
古い設備を設計建設して
いた新日鉄エンジニアリン
グは、操業担当の日鉄環境
プラントソリューションズ
（株）と連携し、限られた時間
でどのように手を入れ、再
稼働させるか、手探りの調
査・検討を行なった。
一日約百トン、二年で六
万トン処理する――。釜
石市との事業契約を結んだ

一〇月から翌年二月二〇日
の立ち上げまで、約四か月の
メンテナンスは困難を極
めた。図面が廃棄されてい
たため、古い炉を知り尽く
したエンジニアたちが再び
招集された。老朽化のため
前日に整備したばかりの設
備がうまく動かない。例年
にない寒波に見舞われ、マ
イナス一〇℃に凍てつく施
設内での作業だった。
釜石の早期復旧・復興の
ために必要な閉鎖溶融炉の
再稼働。地域の期待を一身
に集める中で、あきらめる
ことなど「あり得ない」。
この思いが、引退した炉に
再び火を点けたのである。

2011
11・1

岩手県オイル ターミナル(株) 復旧工事

震災により業務を停止
していた釜石市の石
油類流通基地IOT(岩手県
オイルターミナル)は一
月一日、約八か月ぶりに石

油・LPGの出荷を再開す
る運びとなった。
このターミナル一式を建
設していた新日鉄エンジニ
アリングは、復旧に向けた
現地調査を震災直後から実
施してきた。石油およびL
PGのタンク計一〇基の流
失こそ免れたが、釜石湾に
面したIOTは津波の直撃
を受けている。電気計装設

備や配管、機器類や事務所
の被害は甚大で、復旧には
困難が予想された。しかし、
IOTには供給者としての
使命がある。
「寒くて需要が高まる冬を
前に、必ずや復旧させたい」
その思いにどうしたら応
えられるか。エンジニアた
ちは方案の検討を重ね、多
くの人の協力を得ながら、
ようやく実現にこぎつけた。

業務停止中は、石油やL
PGは他県の基地から配送
されていた。道路状況の悪
くなる前に県内基地を復旧
させた意義は大きい。



2011
10・17

釜石市鶴住居地区 医療センター建設工事

「さあ、助かった人たちのこ
とを考えなきゃ、と思い
ました。そのひとつが医療です」
釜石市役所の保健福祉部・健康
推進課の赤崎は回想した。同僚の
澤田がゆっくり頷く。地震と津波
で命を失った身元不明の遺体は、
彼ら保健福祉部の管轄になる。遺
体安置所を回り、膨大な書類をつ
くり、火葬し、お寺に引き渡す。
その任務が一段落したときのこと
を赤崎は思い出したのだ。

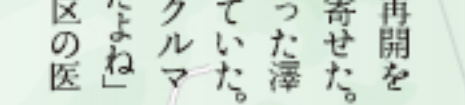
釜石市では、二つの病院、六つ
の診療所、九つの歯科診療所が被
災した。約六十か所の避難所に、
全国からの医療チームが駆け付け
ている。医師会と被災した医師ら
は災害医療から地域医療への移行
に取り組んでいる。市の医療機能
を取り戻すために、施設の整備が
急務だった。

完成は
早いこと
はない。
根木たち
は、三月末のことである。彼はか
つて、ラグビー部のV7に沸く釜
石で、思い出深い新人時代を送っ
た。そのまわりの風景は、もうない。
呆然とする根木ら社員たちを奮い
立たせたのは、自ら被災しながら、
山積する業務に奔走する市職員た
ちの姿だった。
一億円相当の建物をつくって寄
贈する――。支援の骨子は社内で
いち早く決定していた。それを伝
えた根木らに、市からの申し出が
あったのは二週間後のことだ。「市
北部の鶴住居地区に、医療施設を
つくってほしい」。この地区は二
つの診療所を津波により流失し、
医療の空白地帯となっ
ていた。

その一つ、はまど神経内科クリ
ニックは、二〇〇二年から鶴住居
地区で開業していた。その診療所
と自宅を津波に流されたが、院長
の浜登は負けない。震災わずか四
日後の三月一五日から、釜石市内
の空き物件を借り、診療を続けた
のである。釜石を去る医師たちが
いる中、地元に残まることを浜登
は迷うことなく選んだ。

「わすか七か月で、ここまでして
いただいた、ありがたいことです」
一〇月一七日、この医療センター
での診療を開始し、念願の地元
へと戻ってきた。待機させていた
看護師などのスタッフも呼び戻し、
震災前とはほぼ同じ体制となった。

初日には、地元での診療再開を
待ちかねた患者たちが押し寄せた。
その光景があまりに嬉しかった澤
田は、自動車の数まで数えていた。
「朝の二〇時に、駐車場にクルマ
が二二台も。大賑わいでしたよね」
こうして釜石市鶴住居地区の医
療は、再び歩み始めた。



設計主監の砂川 現場を支えた太田、北條

2011
4・16

矢の浦 下水管橋 仮復旧工事

このまま釜石を去っていいの
だろうか？ 四月一六日、復
旧の応急工事を終えた現場で、大
場は後ろ髪を引かれる思いだった。
彼が釜石に来たのは約二週間前
の四月一日のことだ。現場は国道
四五号が通る「矢の浦橋」で、釜
石湾に流れ込む川に架かっている。
震災の日、釜石湾から逆に流れ込
んできた津波は、橋に隣接する下
水管橋を襲い、全長約百メートル
のうちの三分の二を破壊した。復
旧の緊急度は極めて高かった。な
ぜなら市全体の汚水の八割が通過
し、処理場へとつながる要所だっ
たからだ。

かつて工事を担当した日鉄パイ
プライン(株)に復旧要請が入った。
混乱する現場での臨機応変な対応
が強いられることは必至だ。そこ
で、土地勘のある者として、釜石
ラグビー部に在籍していた泉と共
に、大場が志願してプロジェクト
メンバーとなった。彼は釜石工業



仮復旧にあたったNSPLのプロジェクトメンバーの一部。前列左から1人目が泉、3人目が大場

高校の出身で、釜石には親戚が暮
らしていた。
大場たちは早速、国道の橋の上
歩道部分に管を仮設置する計画を
進めた。通常では考えられないが、
スピードを優先した現実的な最善
策だった。
最初にして最大の関門は、資材
の調達である。七〇〇ミリ径とい
う下水管のサイズは明確だったが、
必要な長さがわからない。両端の
埋設部分は他社の施工のため、全
体像が把握できないのだ。現場と
図面のやりとりができればよいが、
メールやファクスも通じない状況
だった。
メンバーたちは、機転を利かせ
た。膨大な資材が眠る本社の倉庫
から、竣工図面を探し出したので
ある。それは、三〇年以上前の工

仮設住宅に隣接した鶴住居地区医療センター